

「 団 欒 の 時 間 」

明星学園 宮下 智

ある知的障がい福祉関係職員研修会での一コマ。

「あなたの幸せは何ですか？」と講師から問われた参加者が「家族揃って食事を食べることです」と答えます。

さらに講師が問います。「あなたにとって家族っていうのはどなたですか？」と。「私に、妻に、息子二人。一人は大学に出ているので時々帰省します。弟はまだ高校生です。長男が正月とかに帰省して、家族全員が揃い、夕食に鍋を囲んで楽しく語らいながらの家族団欒が私の幸せです」と答えます。

本日の研修会のテーマは『みんな幸せになりたい』、言わずと知れた明星学園の理念がそのまま研修会テーマになっています。

講師はさらに問います。「あなたは、自分の幸せが家族団欒の食事にあることを知っています。ではあなたは、目の前にいる知的障がいの方に家族団欒の食事風景がない、あるいは足りないと思ったとき、その方に家族団欒の食事風景を提供する応援をしていますか？」と。

実は、このような研修会で、このような質問に対する答えは職員の資質によって二種類に分かれます。一方は【ハッピーな人生】に通じ、もう一方は【惨めな人生】に通じます。

例えば「私は入所施設で働いています。家族団欒の食事はどう考えても入所施設という特性上、不可能だと思います。そのようなことをしようとしてもスタッフも少ないし、給食の方々の反対もあるでしょうし、上司の考え方も古いですから無理だと思います。」という答えはどちらの人生に通じるのでしょうか？

もちろん【惨めな人生】へ通じる道の上にあります。その入所施設に暮らす利用者さんにとっても、さらにその支援職員さんにとっても、この先【惨めな人生】が広がっているでしょう。

なぜなら、自分ができないことの原因を、制度のせいにする、財源がないせいにする、上司のせいにする、組織のせいにする、忙しい、大変だ、etc というような変えられもしない周囲のできごとに求めているからです。変えられるものは、今と未来と自分、変えられないものは過去と他人とはよく言われる言葉ですが、変えられもしない他者を責め、批判し、文句ばかりを言い、自分に対する言い訳ばかりでは利用者の方々を巻き込んで【惨めな人生】を突き進んでしまいます。

では、次のような答えはどうでしょうか？

「私の事業所には、Aさんという方がいます。家庭的に恵まれず、帰省しても楽しい時間はほとんどないように思います。父親は、ガミガミ本人にケチをつけるように文句を言い通し、母親や兄弟が少しでも本人の味方になろうものなら今度は夫婦喧嘩、親子喧嘩の勃発、とても家族団欒の食事どころではありません。最近では帰省も遠のいています。そこで、スタッフからAさんに提案しました。何か一緒に作って食べない？と。時間のかかるもの、調理の腕前が必要なものは、逆に職員の負担になってしまうので、簡単で美味しい、負担が少なく、長続きしそうなもの、そして家庭的な雰囲気がするものということで、ホットケーキ作りを提案しました。ホットケーキは何よりもAさんの大好物です。効果はてきめんでした。Aさんは、とても楽しみにしてくれて、しばらくすると今度は新入職員や新担任と、仲良くするきっかけ作りのツールとしてホットケーキ作りを使うようになりました。」

この道は【ハッピーな人生】へつながる道です。利用者の方も支援職員もともに歩む幸せへの道程です。Aさん家庭環境の厳しさに心を寄せ、少しでもできることがないかとアイデアを巡らし、自分のことよりもAさんのためと利他的に思考する、その先にハッピーハイウェイが続いているのです。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

Bさん、超偏食の持ち主、一番偏食が激しかったころ、彼はジャガイモしか食べなかった。ポテトサラダに熱々のジャガバタ、これが彼の食事だった。母親の愛情がしっかりつまった差し入れの手作りポテトサラダがその頃の彼の最高のごちそうだった。

その頃Bさんの所属クラスではCさんが担任の男性職員と一緒に食事をしたいということで（自分の食事を

拒否した後、休憩時間に食事をとっている職員の姿をじっと窓越しに見ているというようなことがきっかけで時々夕食を特別に二人だけで食事をするというようなことが始まっていた。こちらの方の支援効果は抜群で、生活全般が穏やかになり、パニックや尿失禁、他害などが激減していた。Mさんは父親との関係が悪い。残念ながら大切にされたという経験に乏しい。その不足を担当の男性職員との穏やかな食事風景が補完したのだろう。そう私たちは感じていた。

そこでBさん、偏食を直そうという気などさらさらなかったのだが、とにかくCさん以上に家族団欒な食事風景に乏しいと思われるBさんに足りない愛情を注ぎ込むつもりで、職員の食事時間を利用して、家族団欒の食事風景を準備しようと考えた。

まず職員に提案、「Bさんに家族団欒の食事をしてもらいたいと考えています。しかし、残念ながらそれがすぐにもできる環境はなかなか用意できそうにありません。そこで大変申し訳ないのですが、職員の昼食の休憩時間を利用して、週に一回、土曜日が日曜日かと思うのですが、職員と一緒に食事をしてもらうことはできませんか？」職員集団からは、検討の上すぐに答えが返った。「良いですよ」と。

この時間、団欒の時間と名前が付けられて、支援がスタートした。Bさんはこの時間をとても楽しみにして、時に職員が忘れると、大声を出したり、片付けの反復行動が出現したりとで職員の怠慢を教えてくれた。

ある年の年末、彼の集めた広告用紙は全ておせち料理の物だった。さっそく職員は、彼の希望がお正月の家族団欒の食事風景にあると察し、重箱は担任職員の自宅から持参し、お惣菜はスーパーで購入して、お惣菜を重箱に詰め直して正月を迎えた。Bさんの心の中には、確実に家族団欒のあのほんわかとした、何とも言えない安心感が実感として広がりがつあった。

団欒の時間、次第に職員の皿を、「アウ」と指さして、ちょっと分けて欲しいなあと伝えるようになった。分けるとご機嫌で食べた。安心を提供してくれる空間で彼は素直に自分のちょっと動いた気持ちを勇気を出して伝えることができるようになり、その挑戦は支援職員の暖かい眼差しと笑顔の中で実現された。細やかな「通じた」という安心感が、さらに彼を安心させた。気がつけば、用意されたジャガイモの量より、職員のお皿から分けてもらう給食のメニューの量の方が多くなっていった。一週間に一度の団欒の時間、なけなしの時間を作り出し、職員の休憩時間をBさんのためならと提供する、その努力はBさんのかけがえのない人生の大きさに比べれば、ほんの小さな出来事に違いない。しかし、その小さなできごとの積み重ねは確実にBさんを変えつつあった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

この団欒の時間の安心感、心理学用語で支持的環境という。あるがままでいられる、自分が自分の居場所だと感じる場所と時間、人間関係をいう。人は成長過程において、この環境を得て外界に対する絶対的な信頼と肯定的な自己像を育むと言われている。一番身近でしかも一番短い形でこれを表現すれば、「怒られない」環境ということになるだろう。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

数年の月日が流れる頃には、Bさんのあれほどひどかった偏食は姿を消した。彼は給食を食べる人になったのだ。

偏食は自閉症スペクトラム症に見られる大きな障がい特性のうちの一つである。味覚を中心とした感覚障がい背景にある。つまり治りにくい行動だ。

が、「発達障害は発達する」とは彼の神田橋條治氏の金言だが、まさに「発達障害は適切な支援を提供すれば発達する」なのである。明星学園の実践がそれを教えている。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>